

【事例紹介】

新潟大学が進める日露医学・医療交流

－グローバル医療人育成の教育モデルの構築とその展開－

Promotion of Japan-Russia Medical Education and Health Care Exchanges in Niigata University: Construction and Development of the Educational Model for Global Medical Professionals

新潟大学 G-MedEx 統括センター長 山川 詩保子

新潟大学 G-MedEx 統括センター ラズビナ オリガ

新潟大学国際交流戦略委員長 日比野 浩

新潟大学医学部長 牛木 辰男

YAMAKAWA Shihoko

(Director, G-MedEx Control Center, Niigata University)

RAZVINA Olga

(G-MedEx Control Center, Niigata University)

HIBINO Hiroshi

(Head, International Exchange Committee, Niigata University)

USHIKI Tatsuo

(Dean, School of Medicine, Niigata University)

キーワード：ロシア、グローバル医療人、海外の大学との交流

1. はじめに

新潟大学は、地理的に近い極東地域およびシベリアに位置する複数の医科大学と、25年に渡り双方向性の医学交流を行ってきた。この活動は、ロシアの医療水準を向上させてきたと同時に、本学の医学生や若手医師へ国際医学に対するモチベーションを与えてきた。平成26年度（2014年度）には、文部科学省の『国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム¹』『大学の世界展開力強化事業²』へ採択され、今までの交流を大幅に展開させる機会を得ている。また、平成29年度（2017年度）には北海道大学と共同で申請した『大学の世界展開力強化事業タイプB プラットフォーム構築プログラム』にも採択され、全国レベルの日露交流の取りまとめ役を担うこととなった。このような日露の協

¹ 文部科学省『国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム』は以下の URL を参照
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/06032818.htm

² 文部科学省『大学の世界展開力強化事業』は以下の URL を参照
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaiikaku/sekaitenkai/

働によって進歩する医学と医療は、「ヒトの健康」を守ることで、両国の国民の福祉のみならず産業や経済の発展に大きく貢献する。本稿では、これらの事業を中心とした本学の日露医学交流の実績を紹介すると共に、その将来展望を述べる。

2. 新潟大学の日露医学・医療交流

歴史的に日露友好の玄関口である新潟は、ロシア総領事館があることから明らかなように、ロシア人とはつながりが深い街である。本学とロシアの交流の歴史は長く、平成4年（1992年）にまで遡ることができる。当時、チェルノブイリ原発事故被災者への人道支援を契機に中山太郎衆議院議員が設立した日露医学医療交流財団からの要請があり、シベリアのクラスノヤルスク内視鏡トレーニングセンターの開設と技術移転を行ったのが最初の交流である。平成5年（1993年）には、クラスノヤルスク医科大学に、極東地域の極東医科大学（ハバロフスク）とパシフィック医科大学（旧ウラジオストク医科大学）を加えた3大学との交流が開始され、平成10年（1998年）には部局間協定を締結した。その後、本学は、双方向性の日露医学交流を国際活動の柱の一つと位置づけてきた。現在までに、実に250名以上の医学生が両国を行き来してきた。加えて、本学には、ロシア各地から約50名の医師や看護師を招聘し、内視鏡をはじめとした高度な医療技術を伝授した背景もある。



図1 ロシア パートナー校と所在地

3. G-MedEx 事業と運営体制

上述したように、日露医学交流は、本学の際立った特徴の一つである。そして、今まさに、これを成熟させる段階へ突入してきている。折しも平成26年（2014年）に、文部科学省が管轄する『国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム（以下、国費留学生特別枠と略す）』と『大学の世界展開力強化事業（以下、世界展開力事業と略す）』へ、本学の提案が相次いで採択された。国費留学生特別枠は、我が国の政府が優秀な外国人留学生へ生活費を給付することで大学院修了を援助するものである。世界展開力事業は、近年の急速な国際化に対応できる指導的人材の養成を目指す。

両事業では、クラスノヤルスク医科大学、極東医科大学、パシフィック医科大学の3校を中心パートナーに据え、日露の架け橋となって両国の医療を発展させ、さらには世界の医学の進歩に資する「グ

ローバル医療人」を育成する教育フレームワークを創出する。すなわち、それぞれは、対象となる学生の種類やプログラム内容は異なるが、達成目標は同じであることから、相乗効果を狙い、“G-MedEx” (Globalization and Medical Exchange Project for Career Development of Young Students in Japan and Russia) と銘打った上で一括して運営と評価を行う組織を構築した。

まず、これらの事業は、全学を挙げての活動であることを強調しておく。学長の主導の下、G-MedExの推進において中心的役割を果たす「統括センター」が医学部内に設置されている。これは特任教員と事務職員の計4名からなるエキスパート集団で、事業運営の他、学生の成績管理、事務などを一手に引き受ける。加えて、教育の「質の保証」を含む事業全体の活性化と成果の全学への波及を担う。すべてのメンバーがロシア語もしくは英語に堪能である。統括センターと連携して事業の詳細な内容を決定するのが本学運営委員会である。一方、ロシア側でも、協定3校がそれぞれ運営委員会を設置しているが、中でも本学と最も関係が深いクラスノヤルスク医科大学をロシア側の取りまとめを担うハブ校とし、その学内にG-MedExのロシア出張事務室を置いている。日本側とロシア側は、統括センターを介して綿密に連絡をとって事業を共同運営している。さらに、本学運営委員会と協定3校の運営委員会から組織される国際連携運営委員会は、G-MedExプロジェクトの最終議決組織として機能している。事業の成功には、その進捗状況と成果を客観的に把握し、修正していくフィードバック体制が必須である。そのために、4名の本学医学部教授からなる内部評価委員会と、4名の有識者からなる外部評価委員会を設置している。年に一度の会合を通じて公正な評価と意見を得て、事業内容の改善を図っている。

4. 多層的な交流プログラム

事業は、学部学生を対象にした「医学生交流」と「大学院生交流」の二つに分けることができる。医学生交流は、短期間ではあるが国際医学への動機を与え、相手国との親睦を通じて将来の深化した交流につなげることを目的とする。大学院生交流は、日露のグローバル医療人材を育成する実質的のステージであり、参加する大学院生の大半は医師の資格を持つ。両国のニーズを踏まえて各大学の特色を活かしたプログラムを設定する。すべて英語を使用言語としている。事業参加者は、事前に成績、英語力などの成績評価と面接を介して厳正に選抜されている。以下に多層的プログラムの詳細を記載する。

A 医学生交流

(1) 夏期医学生交流プログラム(10日間双方向): 夏期休暇を用いた約10日の双方向性交流である。プログラム終了後に1単位を付与する。

受入 - ロシア側協定校から、合計約7名/年を受け入れる。日本の医学・医療とその現状を紹介する講義や学生の希望する教室での演習・実習を基本とする。病院見学も提供する。

派遣 - 2~4年生を対象とし、合計約7名/年の本学医学部学生を、ロシア側協定校へ派遣する。世界展開していく我が国の学生にとって、外国の医学・医療レベルとその現状を直視することは大切である。事前に調査する希望分野に合わせて派遣先での所属教室を決定し、患者を直接診る臨床実習や研究に携わる基礎医学実習を実施する。



写真1 夏期医学生交流
クラスノヤルスク医科大 日露細菌・伝染病・感染症センターにて

(2) 医学研究実習プログラム (2ヶ月派遣) : 3年次の学部学生をロシア側協定校へ約2名/年を派遣し、現地の教員によるマンツーマン指導の下、本格的に研究させる。履修済の証明書を確認の上、帰国後の成果発表に合格すれば、7単位を与える。

B 大学院生交流

(3) ダブルディグリープログラム (Double Degree Program/ DDP) (2年間受入) : 協定3校から毎年度1名ずつ (計3名) のDDP受入を目標値として設定している。医学研究には、一拠点での継続的な活動が必須である。よって、本学が採用する4年制の行程の中で、基本的に前半2年はロシア側、後半2年は本学での修学とする。入試の後、事前に所属教室と研究内容を相談する。(1) 日露間で協議の上、決定した単位数の取得の条件において、(2) 国際誌に発表した最低1本の主及び副英語論文を同専門分野の研究者の審査をもって提出、(3) 口頭試問による最終試験受験合格、(4) その結果に基づく医学部教授会と国際連携運営委員会での承認、とする。ロシアの大学院は3年制のため、3年次末に一旦帰国し学位審査を受ける。ロシアのニーズに合わせ、感染症、生活習慣病、地域医療などの3つのコースを設置している。

(4) ダブルディグリーを伴わないプログラム (Regular PhD Program/ RPP) (双方向) : 両国共通の研究対象に絞り、単位互換を可能とした複数の履修期間からなるコースを設定し、母校のみで学位を取得する。

受入 - 高い医学・医療水準を誇る我が国において、本学は日本海側で最大級の医学・医療施設を有する。したがって、ロシア人学生が短期間でも本学へ留学することには大きなメリットがある。そこで、上記DDPの3つの特別コースを活用し、個人の希望と修学期間へ柔軟に対応した教育研究を提

供する。計4名/年程度を受け入れる。

派遣 - 極東ロシアの決して高くはない医療水準と地域格差による医療サービスの不均衡は、高齢化と地域の過疎化が進む近未来の我が国の医療事象を考える上で、有用な題材である。また、結核・ジフテリア・エイズなどの感染症をはじめ、我が国では少ない疾患に向き合うことができ、研究対象やグローバル医療人育成の意味においても利益となる。以上より、ロシア各校の特徴と強みを活かした感染症、心血管病、予防医学などのコースを開講している。計2名/年の派遣を目指しており、滞在期間は2週間から2~3ヶ月と柔軟なものにしている。

(5)国費留学生特別枠：国の支援の下、本学医学部の正規大学院生として4年の間修学し、学位の取得を目指すものであり、ロシア側協定校3校から合計2名/年を受け入れている。ここでは、上記DDPの感染症コースを活用し、専門性の高い教育研究を実践する。高度な医学知識や研究技術を習得する。

5. 学生支援

G-MedEx では手厚い学生支援に取り組んでいる。外国人留学生の最大の懸念である住居の確保をアパートの借り上げなどを介して全面的にサポートする他、体調面の管理などに関しては、精神科医1名を含む数名の医師からなるヘルスケアセンターを設置している。また、各プログラムの使用言語は英語であるが、日常生活における日本語学習支援として、日本語講座の開講を働きかけ、平成28(2016年)年度より実施されている。さらに、ロシア人学生の本学滞在に合わせ、日本の第一線の研究者を招聘して特別講義を開催し、知識と教養の深化を促している。派遣の日本人学生に対しては、渡航前に複数回のオリエンテーションやセミナーを開催し、十分な安全情報の提供と注意喚起を行っている。また、「日露緊急連絡網」を整備し、24時間体制で渡航中の学生支援を可能としている。

G-MedEx の中で、学生のキャリアパスを支援することは極めて重要である。学生は医師や研究者として活躍することになるため、特殊な支援体制が必要である。統括センターが中心となってロシア各校の運営委員会と密に連携し、プログラム修了後の学生の進路決定の支援準備をする。Facebook内で同窓会ページを立ち上げ、プログラム経験者が自由にコミュニケーションできる場を提供した。学生同士で情報を共有するほか、進路相談も可能にしている。

6. 事業の周知と成果の公表

二つの事業の開始に際しては、事前にロシアへ渡航の上、十分な意思疎通を行い理解が得られたが、実際の運営にあたって様々な問題が起こることは避けられない。それらの予防と迅速な対応のため、現地教員への説明を目的としたFaculty Developmentを、年に複数回行っている。また、交流の進捗状況や教育・研究の成果を発表し、G-MedExをさらに発展させるためのワークショップを年に一度、ロシアまたは日本のいずれかの都市で開催している。平成28年度(2016年度)以降は、毎年、協定3校

と共に「日露医療シンポジウム」を開催している。これは学生と教員の協働による貴重な発表の場で、事業成果のみならず、医学の教育と研究における多彩なトピックについて発表・議論される貴重な機会となっている。新潟市内で隔年企画される市民講座では、日露交流を推進する市・県と連携の上、G-MedEx を一般の方々にわかりやすく説明し、分野を超えたつながりを作ることを目的とする。これらG-MedEx の活動は、パンフレット、ホームページ³のほか、毎年度末に発行される事業報告書によって広く公表されている。

7. 今後の展望

本学では3校を中心に事業を展開してきたが、これまでの取組や実績が広く知られるようになり、本学と新たに交流を希望する他の医科大学がロシアにおいて増えてきた。そこで平成29年度(2017年度)は新たにサンクトペテルブルグ大学、カザン連邦大学、北東連邦大学の3校から実験的に学生を受け入れることとした。前者2校はヨーロッパロシアにあり、北東連邦大学はロシア国内随一の広大な敷地を持つサハ共和国の首都ヤクーツクに所在する。平成30年度(2018年度)にはさらにカザン医科大学とも交流を開始する予定である。これまでシベリアと極東地域のみであった相手大学がロシア全土に拡大することで、同一国内での医療格差など、本学が直面する地域医療の問題についても俯瞰的にとらえることが可能となり、学生交流の拡大とともに、プログラムの活性化が期待できる。

DDP や RPP、国費留学生特別枠といった大学院生交流を円滑かつ効果的に進めるには、日露教員同士の綿密な意思疎通が必要である。加えて、より高いレベルでの両国の医学・医療の発展のためにも、国際共同研究の構築が非常に重要になってきている。現在、その取り組みが感染症などを中心に始められている。共同研究が発展することで、教育フレームワークもさらに強化されていくと考えられる。

冒頭に述べた『大学の世界展開力強化事業タイプB プラットフォーム構築プログラム』は、日本とロシアの大学間交流の情報や経験を集約し、活用するための場を構築するものである。また、平成28年(2016年)5月に日露首脳会談で提示された「8項目の日露経済協力プラン」に寄与する人材育成と、同年12月の日露首脳会談において設立された「日露大学協会」の具体的な活動計画の立案が求められている。

主幹校を北海道大学とし、本学と共同申請した事業案は、産業界や地方公共団体等の協力を得て「医療健康」、「都市づくり」、「中小企業交流」、「エネルギー開発」、「産業多様化促進」、「極東の産業振興」、「先端技術協力」、「人材交流促進」での日露交流の全面的な拡大及び発展を目指すものである。具体的には、日露の他大学の参画を得て、両国の多様な地域ステークホルダーが協働するコンソーシアムを構築し、「人材交流セクション」と「専門セクション」を軸とした人材育成と交流を推進していく。

³ 新潟大学世界展開力事業 G-MedEx ホームページ
<http://www.med.niigata-u.ac.jp/g-medex/index.html>

本学は、主に「医療健康」分野を牽引する。その第一として、本年9月の東方経済フォーラム（ウラジオストク）に合わせて日露医療シンポジウムを開催した。文部科学省審議官およびロシア保健省の副大臣らの出席の下、ロシア側協定校の学長より各校の取組や研究成果が報告された。さらに、両大学間の連携体制の構築も確認された。今後も様々な行事を通して所期の目的を達成していく。



写真2 日露医療シンポジウムにて
ロシア側4大学と連携協定を締結

8. おわりに

以上、新潟大学が進める日露医学交流を紹介してきた。G-MedEx は医学分野に特化したプログラムではあるが、グローバルという意味から国や学部などの垣根を越えた幅広い国際交流の起点となることを望んでいる。本学のこれまでの日露交流の実績やノウハウが、プラットフォーム構築プログラムを通して全国の大学に波及し、日露交流の活性化につながることを期待している。日露両国の友好がより一層深まることを祈念して、本稿の締めくくりとする。

参考文献

日比野 浩 (2016) 「新潟から展開する日露医学交流」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』No. 1003 ユーラシア研究所 pp. 2-14